『海紅』（山崎　聰　第一句集）より

貨物昇降機ひとつ影を落として冬野あり

鉄橋長く黒く寒夜を童話めく

鳩が啼きいつも冬田のそこにいる子

灯る帰路顔の高さを雪飛んで

蜜柑甘くて赤いジャケツの彼がいない

鱈干され島のあたたかさの老婆

病む指が匙持つ結氷期の青空

牡蠣砕く木槌夕焼け崩れそうで

音楽光る早春の海にヨットを置き

涸れ川に雪降る眼帯の裏灯り

（昭和34年～41年）

松村　五月　抄出